和の八十七

ロ 9
3585
1

ロ9
3585
1-13
門口
號 3585
卷 1

十五 八ノ上

曾
門
號 385
卷 1

東京共立図書館
錦町
坪内雄蔵氏寄贈

凡例

一 此冊は文二帖にやうにやさしくしむけこれ
一 女婦のをしへともおるべんへかきもいやしれるを
かさうとて後は俗例よりもしべきなり
一 意女の部は二帖にこれこれ
出やいとて後はうつくしむなりこはさと記
一 春は歳の初出し或同義倫のどれこれ
よのまれといへどおるべし
一 賢女貞女はまれ源氏の物語かさしはをおもひ
のこゝろわべし 物語は男女をもてあそぶるんを
る中にやうなるなかばうつれやはおるべ
貞女列女の二帖は俗のおがうるれば俗の物語の

明治五十六年十一月十五日
坪内雄蔵氏寄贈

ごくうるべし　但下の帖の物語よりハ二三段ハ男文まぜ文と
くくるべし　源氏ハ第一とする
一　紙せうの類ハまことに例するわこを中にそこうこと
こと延をなるべし　源氏ハおるべ
一　或問の二帖ハ第八男文まぜ文なるわこを中女の歌ハ
おほくハ女文字の文法なり
一　四のまごもんおうんたこと文つのワちなりこを高おうんハ
うりとれあげちたること文をしべしけまどおほんとなる
まくこれをさハしまきぬたりをれハ四るりたとくハ四
蓋ものごとしおほんぶいとしまれぬなり四ハこれまで
それを四とくしまくしまどくしまれぬありをれハおほん
きりなもくハ四おけどし四ほとしむがうんるれど右悲

源氏まに親まと四おといひこそれハ此下のまを四み
とハおほそれあまハよみるかへしこそれハちうんおさ
えよまこそこまきぬまなりをおハ四おなどハ
ものこみくせるるうれも男文まこまて八四おとし
むりに八四ごんりこれ八男文まを女文例ごろみ
くせうるる但し或問の二帖似せるものまをおほん
また第八すくる四一慈母大ろこのこずしよみあり
余ハこるこまにるるく
一　女婦のまれるるくにワきこう慈母れ帖も或問八
皆ちんごなりあこまるふけれどはけおこし
なきをんくべし
などハなどくこそこあきどとンこそあるが

心得ぬるりうんどくうれうハんの家のねだるどもハ
ものうつゆくるりもくせにハあらずこゝ様よりわ
ゝくうれうもそのまなくもむけうを或問の様
ものも業為ハ皆などにくくみくせるゆ家ちい
ゆうあくうハをこうけうもありこれまうるうあ
れとおくうじ其んわんまやこゆやうにハひが
う

一 繁ハ慈母と賢女れ源氏の物語ともてハをうなる
ものハをんべくもてしむるりけまどいこゝ様
ものくかのまをもぐるとしみられあまど主
ぬしのゝ主ものゝくけうゆしもあを
こまもんにくくのれもりうんどりハあやまりて

じうる
元服おこゝゆゆ様うんどうるれ年むるけまハ
せゆくうくせにつけく他者のまをもやをや
ものもかなるくもやまもあるをふくにはは
だのれをゆもけるやるゆ やまずかあまだ
ものくんのまをひどくさけうんもあじ
をまうまをゆいゆうくさけくしは
あくりうを長の例も様ゆあくを主のど
をのにまゆうちやせんといとおし

序

明石高砂乃浦ハあらねどもはるかなる舟ハおぼろにて月あかるところ
さきし所に経残けるころあるなるかむをあれ文似また
なまし侍しかふくいてをしみあるおもろ己か心てにあかま
侍りがたのもりにろすしひおもひ侍ろうやふをなしつでち
かへし語となるべきものとかこそくまとはめしし侍ど
折ぬし共消息八月ハしあつきころりが田面の露すす
うき侍をしも我よに入るぞ思ふのなすがら夜拵のそし
づるまで手習するび侍りしがそこそろとするあわわれ
なりしぞあふさきろさにいとなみづらうまくる侍り
しかバとりゆく月日ハをやくてそしこゑさけらん
すくもなりしがことよ　のふおこまりおもろさおぼく、

とりもあへずやくなれすがどもうきつぐりをこまれにて
うちてゆるのやとりろ名づけはりしそれもりんすも
やなすうひはりしるもと被四屋のれくに日記などの
やうにうきくつとうち月ろるまにはまをつりよか
りに名り此はまと其姫よはわるぬが遠乃ゆにおすで
ろなり姫まくはるが是ハワれくるるしうおりん
みるいなるがうれ乃姫よおすぐうんをなをせうる
やうにいひおこを作りしが我うるまにおろく
あられよ見てハまれよまと大巻をうれそくてはち
りー裏のはゆ一のなりー作るり稼ぐさう作ることう
はるぶひすぐうるひてやうと物義ぐちあまさ
こなひくくりむろばつげつえくいて義をなるす

ぐもうはうさなうさむとうりうるんよ中くよんな
を下ぐれの反抜まこわるるく棒の辛くをとうを
なぐいひしる作ひをぐをどもたぐこれハもうをを中乃
まるひぐさにうる作をいうぐはるすしてかしえ人
乃ちるーちをうえんよハとうけひずはるとをうびせさ
びるぐせあられくはのをやハるぐをうれべをうし
てんやすぐんおりしをうくるんを男女なれーえに詩
絵引女侍小学るぐ作をと大れ女ハりらのをこたてもお
ぼつなれがうれバ乃ぐれ月るりのぐにるれべーこ
をれくく后妃の化粧列女の様もあるもくおびぐく
ぐふうちいうるすハなーがうれ幸もおはくなるぐさ
すもなれるは時れのうりうもおるるぐば

中なるがゝ下はたをけをくなれしやまとうんかぶそれお
しへよハ紫の皮女が原氏物語ぐ作までそれも中な
るがゝ下ゝとてそ奇えにもなるひ物ひがかこれ
ゝとそ嗜分のうぶみともなりゆるんだがゝもハおな
しけたにの大和ことばといへど耳うゝくゆるれあす
のもにそぐまぐ男ゝ字にたぐひてむつゝうれなり
人おほうんすまぐ我ゝ物ふれまげゝしゝ中なるがゝ
のやくゆるゆハさくくとれゝゝひぐさにぐにすぐゝ物
ゆるんだがゝ下ハ物ぐくのゝくゝすゝれとだに
てはゝにくなるひてゝとぐさなまぐハおるゝ綾女
山ぐ川のおれゝぐどゝのんゝくむひ形おぐゝりすゝんれ
せぐ績み機とゝくさなひれゝゝひぐさゝもゝゝむ

さりやゆるんさハとゝぐどゝぐのくゝくゝさゝ物ゝさ
けゝぐゝも所ゝ中れ三ハなゝぐゝなゝんちゝばゝさゝれ麻
所のゝゝとゝぐゝれのの物をゝる四まに物をゝる女れ姑
にゝくまに必ゝるたをけもゝちゝまゝにハんゝんゝ
ゝれたゝてゝよゝぐのいゝゝ古ゝれんとゝりさけゝ
ゝのゝゝりゝゝあゝぐさにちゝぐどゝゆゝまゝなゝり

婦鑑文上目録

一 嫁のために迎事 付り父母文書の事 付り僻解の婦の事
一 先ゝ教ゆる事 付り父母書簡を知事
一 父ハ女子を愛し母ハ男子を憐む 付り孝行の事
一 兄と敬ひ弟を愛し 若年の事
一 藝能をつとめる事 付り手紙認べき事
一 奇妙の事 付り奇事の事
一 源氏伊勢物語見る事
一 仮書事 付り真名かく事 并 大姑曾母の事
一 絵かく事 付り女能多らざる事
一 琴弾事 付り今様謡の事
一 呂律調の事 付 花月多の事

容に対して云糸づる吾ごと行れす付り衣裝ゝそひの事
一幕末左るゝの云糸とらる付り夜ハ容兵球にくくるゝと云す
一貝ほのゝ也遍松れ支
一今やれ走ゝと云す付り上籠の女喜れす
一嫁取して男姑小男に支仕れす付り婦と姑と板事れす
一支に負ひのゝ云す付り支れ苦恐ハ婦人よりゝと云す付り妙考お話のる
一幼少して父母をゝひゝ病にして支を暴ひゝほりて父母男姑
支ゝおろにすると云す付り父王后乃事
一支れ兄弟ハ女の兄弟同おのゝす付り男子にハ父義一女子にハ母教す
一権花ハいやゝ云す
一家乃す付り菅相恐ハ欲八れの姫支れ恐家乃支
一賢をゝ孫ゝ愚ゝとあるゝす付り蒲妃乃事

一支ハ天に祀ゝ女ハ地よゝ恐る事付嘉れ事
一継子あるゝす付り母宝負切とすれす
一毛詩ゝ七人あゝ母乃す付り業平百もれ者の事
一侍児達にゝびやゝされ負列を妨ぐんとすゝす
付り時宜にゝり孫嫁もふ若す

鳥の文の上

田の面の鳥のまそりくろきをぐさにつくし隠岐長泉寺
らせしまゝゆる鳥をもちわひていねどにあてゝもおこされ
ばさぞふやもちをおぼつかうもんさハ去なりとゆる
用弓のいろももやくそれ去にりもたゝ城ゆよお
もむきいまゝ中へゝぐぬ四筆おぐられ給れうすみ
とばいうぐ四境ゝやゝせをつきぬよそひといづこもこ
とぐくにのうくい二と場三年がくらゐんりゝ又弓に
花の四をそこもいよゝ浦びまさうせ場ゝんとを
くゝ見まいゝ場ゝくおりゝ入りゝ去ゝ那時の潮の
らゝ行もちゝぬ雅に果の落ば佛ぐどうたくゝよむつ
ゝゝんすとバ去祭ゝくうゝてゝ又四月れぐ見にもゝゝ

事ぞ〳〵ハくるしかるまじ
の沈をも出給へ世〳〵きむとゝやいゝ〳〵ちかゝ
れものゝ給をもくみ給へ〳〵とおもく書方人
にとゝ〳〵花ハさぞありてもはかゝしのうひなれ男
ふくハいぐゝゝゝゝゝ
ひつまゝく繼どいにしげさむゝんにつずゝとゝ
くさひくへハ耳なけきとゝ薪れ花とやんゝくひゝ
〳〵ちゆゝ〳〵ゝの形ぐちやりゝ〳〵ぐをむけ
ぶにるゝぬづゝゝ〇ゝゝとれ繁ろぐゝ〳〵ハ
はくだ山ゝやゆ蔵山ゝたげくゝをれんゝちらをゝ
くゝゝゝゝわざに思にゝぐやゝくハゝゝれゝもき
ひゝて繁ゝゝみゝゝぐゝゝゝとゝ嫁ゝゝとゝ

りゝゝれぐんハやでんゝてゝかゝちいゝゝゝくゝんハ
ゝてん移ゝけゝハむくゝれおれんおゝゝゝゝ
ハむゝゝちあゝゝかゝれんにぐれんおゝゝゝゝ
ぶハゝてもゝくゝてもゝんよゝゝぐゝものゝくゝくゝぐゝなり
ぐゝるゝんもゝゝなゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝごゝゝゝゝおゝゝまゝんほぐハやゝゝ孫ゝゝ
ちにゝくゝくゝさせ給ゝゝゝ猿ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝまでの親の心もぐてゝハゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝゝゝハ心重にゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひ離れ別ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝぐの心ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝハおゝゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑものとおりうしうしうれいばちごれうぢさへよ
おもゑうさうろはもくこそくなまやもそとばそばうと
さとばますやうにうくいこうろはうるうしいこ身
にうくていとうしうるいこまさもくへていこのあうそうにさ
むうぬともちうくうみさせおひくきくくわぢ
いんのいうぬあとれぢうていくいこ身を前
じてはうえうさせおひうしあるぢうまんとも
ちいうふうさせうくまううまんぬ奴とう是を家
ぬとうてはうまうべうて是のこぢうぢう孝助
まハあうぢよ繕を捉うを汲そぢハ賜山ぢ内
ぢうくうくばいうるいこれやの用とうもぬぢくおりうう
つふ程のくまハうたくさもくへばさうるハおやを

も身をもうえうてうむるうこそうんを是
うるうハおりとくにゆづうせおうんといにおよぢ寸法日
繕来うごう物おうぐをはうあべさやうハうべこ事
うくうぢ美山んよをういうせおうしみうら
うるどおりくさもうるうせおひうんにくとなうおう
おうんハ山親よおとうぢうまうおりまうし
いとけるんとばあうまもせおひくうおうづとうハ
ハうせおひううしさうりとうはうくうるうせおく
も色氣にううくなうれうてそおとくよ紹介
るまくくハおのづうぢ習れりのまくくまうこあまう
ゆううせまくくばもれもくくみかいこづうるなうこ是
らハ山ぢよりうせおうてもおるじるうくさもうぬるれ

髪もげぬのうるくくばたなくてんぐりおよそげて
来掃部のやうにうんもはをくゝ源氏世継などゝ見れば
をばゝまうて四位ゝ去八又ゑぐづにて浮なく
見えハ世ゝ生れるひまぐなくいかゝらゝハ女れわざ
とすれるゝらひどと文字のさうさまをゝ去り赤云
ゝ実やうにくばやくさうべうんわとばあまく称く
るゝ世ゝひうゝ今ゝうゝ見たるゝ多ゝ馬などハ
あまりゝ四位ゝまゝくい去かゝら法ゝ称うゝ八ゝ
ゝ四位ゝどうゝくゝ去ゝ付れ世の人乃風俗情を知ゝ
ゝたるゝひゝさをいゝむゝ平ゝうゝくい女れ云の
ちげくゝむハゝてげるゝわうゝくゝぞさハ去なゝうゝ見を
前ゝ月ゝとゝ見れ吉出の変付ゝてゝけくゝてゝちづ

らるゝゝみのどくゝうハ続なゝうゝわゝうゝくゝうゝ又古今伊勢
物語ゝどの歌ゝくゝ世おゝまゝゝし
に通ゝうゝんゝくゝさわゝうゝむゝ人も口ゝ
九条名仮名ゝに四ゝ行ゝれどくゝやゝうゝふゝみゝ
ゝ義家ゝのふゝて源氏物語をばゝうゝに縁づし
てゝくゝ四位ゝ人ゝけまばゝて打ゝ歌ゝ月の
に四ゝうゝけゝ穏なゝうゝに世ゝうゝくゝ
くゝくゝ物語ゝハゝうゝそゝくゝいゝづゝうゝて
そゝうゝばゝ

其始末をよく尋ねて、げんのおさくうえんよハ世の
うへ赤石ぬけさうなんどをよほんとはなるれうしこも
ほうこ系ふれ、ゑびやうさ有職古実をおしへ給ひ良
くしさハ源氏にもくわハ又なくこそ第一そんぶん
仮初のやうにくどくどもおひあうるにおハしまいのく
敬へくどうくぬ好事にうるうちきハ伊勢の物も伊
勢物語をよ〻ゑこさ女子にんもまでいそう源氏物語
も人のうちにすけう紙をもくぶれバみなぬ名いとづう
事にうるうよハ第一の出仕うくさひ〻女仕初にうせ
給ふもうつくしくあるさ由なうもくこそそくその
人のりどこう給ひぐハ初ごし一筆とれもきふるくこそ
中人ハんおこうるまでうくいと文書名なんどうを

給ふもうくどくどと紙くに筆遣ゆるハみてげよ〻そはごろ
も太文字書名なんど女れうれるうんどりてそやしむ
らふぐうこの筆つれうくこきくれすぐこうこんうして推
もうこもにくげこうこそ中くうこ事筆くあるまでこ
仮初におうるどう給ふ中給ふ夢遊文せよでう筆しゐん
どんどうあうこせ給ひうし人ものいとこと書名大文字なん
どハ藏もうこせ給ふまでうくいと雪女に沈ぶ〻しうして高の
大文字書名として源の世にのこう書ばとして行のうこ
処王の后曽子れ母一云いひとれ給ひ〻金言妙句も
るくうれおう給ふ中ふるれどもくれるるの菌に
あうつもせんぐんの加うぐ〻さハうくれなく大姫聖
女曽母の賢うる事ハ人皆ものうあづま琴琵琶

のすぐひをくて面白き音まくこそよろしく哉
ごしせんひろし給ハたくさん能ありわかず元
人のならるんとうつしくうれなうへと定條の局ハ
いえりひきおハしまさんにれちし毎すくさハがし
さ椛びたりも月花あるらんどもあげまうれませ衣
糸るんどうきうへさせんハむハかぶまうんうし女ろ
ハやもくぐくしくん女おのこよれごとく女子の能ハ
おほくもさむらいハ男にれたつてひとつ坊ひ
つしれバおもりさうぬおりくなんど心をあくはうハせ
物ひろしまたにいまごわくからつくさらう笑なし
どさむらんにいやしくおのござ給まうせにてさ
すく人バそのつよ常さもおもしすにむくつかれて

おもハくさ哉まくへバよ給づわしへさせん給ひろし哉
がうるんとおりようけてまませ給ひくおしれごあ
まハ常ら条くへさせ給ひろし第引よせてく拍
させ給ハく今様ほらし唄るんどさハさせ給ひろし
そをきも謡をそ引をましくバかわりまく興なれ
哉るまてバ其けじめがわりれおのさせ給ひく面白さ
まてハ二の弾せ給て客人をわかず今一つがわりて
名ごり何るさ夜まくうちおりせ給ひろし今様おどハ
多くうらひ引是のよ好く人ハ能ハおつぬすいでささ
弓浅まれきにさむら婦ぞ此頃のすきむすまく三味
おどいよ哉をこのく二ふりたんぜん志のひざおまみか
絲らげける音に引うを今やうとそおんくれてさう

どけぬいのうんどまこ[illegible]らいくりも[illegible]とくもるぞて
月をるぐ[illegible]てくもおるぐ[illegible]るとうひさむ
らいかくく形[illegible]もまいゆれ場やきれまとまて
まとうぬ前にえよいけうふをうてあさ内一を
あさいかやうにそくけもぐとておとぐく蛙ひも
わもりうくうう女れ贅るんどまいりくおりうさ
よひくよえ紫屋けこさいの函のありづれそもこめ
あうわうるぐいくれくもまくくそれくくも
ぐうくひ世ぐくすあまぐさるなうわのこれり
ぬるぐいよ扇のわううはにくげよぐすぐくけま
つうくそぐひいくうくぬるくく折ぐおんば絶くう
はねくていい共者もわうぬやうは呂律の調まていぐ

月をもわうれく四塊うし鬱憑るれとうんうは
世のあうくくんば鬱うう記勝あるうんど一は奥
おまてくそもまおういくく俗函ようんくて月れと四塊
くくくと擦擦さ内じ世ぐるくまし鳥虫を絞れ問を
くてくくぐまに鬼鬱擦ぶうおり行く空
鬱りひくをるんぐこうりうさ内ようくさ場ぐひれ
い投擦く組ようけとくもぐうれいゆ屋さ鬱
がさく投二うニうれわているぐくぐ生るれくくけ擦
わうは紫れはゆうるこ深せ塊ひくんあうさ内
に溜らまくくしぐされのこなどさひうんよ
ぐ鬱るんどゆくさを塊ようまぐくく者うはゆ

うにまうせばひとつ　老女くいなきはひとつ
わいわいとなつまつく　数源おとゝぶりに作らせ
つ　おもしごとはハ表中をあしく又さけを
とくとみまぶもはなはらふもはりまくくハなを
らはなはふれおけまうしいとうんどハわざて
かまくハなくとをかひてつはせはひとく低和もし
人よいゆちらまこうぬさうにおりまうし髪
るんどそうぐはなはひてぐんハはぎぬうにい
つ　ちづくふハ髪なびはげび耳れらへはこびきとち
けるまぐにたどけるもくうぬわてく
ぐもひくはさやくにくハいつもうやんと人
もおりひんざちせぬやくハくはぐちきハびさぐら

に耳ちうみと源氏も女の髪ゆいず乱れなるを
まやうり乱るまバとそこはおこてりまくひ
鬼火のひつてもてちるとひるれハ髪ちりハなき
らなるわまくくぶりしてもり火新ぐびそひうせはひ
うし　国ちうさくうハあるれ家ちくえあるわまく
いぶ女のとんるなぐこうせはひらぐ見あはせる
まるんとまうなるやうに出拾ひうくうとれ
飛人のふハちくわまくくぐ遠松乃年ぐびもおか
くびちくぶうらずうりうぐくくんうだハとり
くれわまくくハ鄙にとりあうはせはひうくし扱
ハ扱ちうんどたぐひまはせおくりまくていさば
らぐくとバ作くれまぐくい又女のかくくひきり

なるもみくちゃにてうそをつくもはらをたつを
ちまちうしゝびろのくんの風流くハさうてハすくてな
所りのまぶしくてりのしてゝぶ源氏の末のよはなる
ひどをはゝくさいすくんを今のくんをんたくんまと
見くばうくいゆくて髪ハかげちまぢとゆくんま
あぢくけるぬハ耳のうし弱ましてうどとゆん
ゝやうにわりて式アガ云ゝ紅粉にてゝおりちふ
ちく首つさ尾くづるあさうげさよいうするん
ちゝんとれちゝくちぢく

薄化粧に鉄漿ぐろとしてよく髪はやく行末おぼつかなき
を何となくおもげ眉ほそく顔うるはしく化粧ほどに細やか
なるやうすにはあらでさらぬ体にほそき帯しどけなく
結ぶすがた何とやらんおもはゆげなる袖を口におほひ
抱かくしてもくるしきは近づき達てといふすがたのみ
せ給ひとましくは世をさへ定らせ給ひていよいよくるし
くおもひしほしみ(?)はおもはくハ中垣をせきたるにはあ
れやとおもしさまにいひすくなきもの女子はすがたはなほ
まさる人もはやとりもしその人ひとりふくはなれん事をおもふ
ずゆき(?)といふハ女子はおかしくにくし(?)しかりとて其家を我
あるくもまたハ其夫の家よりかへるんとしけるにたまふされバおもふ
との親ハ女子はおやのまくればは父母にかへりけはなくさ

せおハしましかれどもわがれをおぼへなくしてよ
こゝろとらせ給ひとしも縁も姓むすびにくからんとするか
とそ嫁ならバ憎がらんといふにしもあらで娘をわらはけ
おかしげなれどもおもしろきにおさせ給ふくれぐれよ
さやうにつくさせ給ひしにも家もくらぶるにさせ
給ふべからずとも擬ぶる瀧をく敷きを見る其
作はせうぐのまくえうてあひもく家にあれバさ
ひねりとなげの給ひくらきとおもこころなくつ
えさせ給ふハ人こと岩木まとさむしかりし深くは
其孝に感じくおもひ物まくえそほそろたるも
くらしさ柳の枝もうらとおもりぞくバ雪よハを
まねとのまくいは松ハ猿におそろしくさむしくとも

ちゝはゝ君うはゝ御ゝ
思ゝ給ゝ
給ひゝ
のひゝ
多くハ女房乃ゝ
でゝ
給ひゝ
ゆるゝ
給ひゝ
なゝ
もゝ
のゝ

女房御れておうせ給ひしゝうゝ
ゝゝ
くゝ
てゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

そでぢくてうきの身おろそうになりのうてさうむ
うまごさうーやうーやゞ文王乃后太姒と申女房ハ
さ六十ふやうてそうこせ給りんそうけるまの文王つみふ
かませ給ふてゆふまうにそうつをさを
給ふ后ゝ一ゝに給さをたまうびに給うまどもかまを
ぐまゝ給うせ給ふまうりに侍ゝ人さうせうくれ給ふ
ぐさうに給ゝ夢にいざなるをうり給ひをうそうけう
うもうつうーにおりひあうに分うまゝバんうもそう奇
わうく和漢ぐ生出ゝうおほゞこはくぐーう
のりのを給うを給くゞゝを落をうさるうさみの
筐にゞにうつうゞハ無はう給おうーまゝゞとうう
彫文しもうそうくに給ゝーの法をおうくバ給ふ新と

きうさうを給ふゝりれうきうのに申よううーず給更とを
とを給ふ事ゝ申ゝを出給母乃に分ゝくハあうゝがうれ
事ゝうゝもんゞうゝずゝやかくゝせばゝて給文母に子
さうにおううさうにうゝうゝせ給くとゝうくハううう
新れ同胞ハまゞ給ゝうゝうゝてゝゞ愛うゝをうう
せおうーまうーうゝ給子うゝうゝうゝをおはゝまゝい
ゞそれくくに義をゝくゝさを給ひうゝ男に子ハ
さうう称れをゝゆうりのうてくバに系うくさを
給ふまおゞすうまゞバとくゞ切ようゝさをとは
ーまゝさバゞハいさあうを給ひうゝ義ゞ申ー
くくゞびとゝうんくもにくゞげるりのうてさひゝゞ
女よハまゝとうれをゝーううとうのうてくバ

ぶ[illegible]をはくさなおりもうし　男子は母に
ちうとんぶされ又ふれハ禁を取に選ぶとやうんな
て我ぶるとうはもぬりのまくいぶけきバそ
ぶ[illegible]ばいどづにくんば協ふ[illegible]しさわざにさむら
いじなちうをはづずとり金はをくさを為ハ
うしさハ去なぶらなりもり取しか内くくで
黒魚にをみとやうんくえあくさむらぶけま
うばまはらぬやうにうしかつとをいてづ[illegible]な
さやうにるハさ為ひぶ[illegible]

花ひらくもいやしからぬやうにわかくさてちらくをはなの
とし花とくちなさしれまざにむかふとてちく露
やみとおれし花を散さへとしさに篭をりざて
擡をとれいさかくしむるハかゝるをみれちかは
ざにハいねがほづきあまもかくくとつていされすハ白
しをはとてにこのれさ念はふかし庭おりしまりし
うらしや紅粉もにくる梅乃花君子乃ふしも流石
たくぢあると読しハ天神のハいつ乃かゝしれ印鉄とも
又嵯峨の院の姫宮ハつれぐに琵琶つれぐ事を伝とてふさ
はりし牛の角文字すぐなりしゆがみりしとぞ是ハ
おぼゆると流きくしはりありすまてハいつくなしや
さしく流くるてまざはしらずやさいづんの名を表さ

あくされはよく八読くさと東西とをゆさましくされはハ
ぬ順者とうしてうるさいぐハあるまじとおもかぶ書ハうハけまで
とくく一向にまよく人も見んせう坊主くてしうはようず
それもやうぞをうし八どと文ふてくべいきふすりかざ
もたくてとびしとおうハすぐさゆまくるしらにらを
ぬれわるる兄ハまぞうちことなるらうんや拙もうくて
まれ世のあるひ我なるをそれとおもらんともあぞる
ことむりしうくくれるせうまくくハそれもうらつく
それ孫文字と名字をいでぬり大宮ハ位とらうあ
地八わしハうま修もしとつれきるしひゆうりひろ
じよくとおりくバれのこハひやうろくも親八親がある
とつうまくさしむへどもせおと結へ人乃う結うもなち

はやこのもの、ハ乃二おりくにたもうくにと称ぢけくバお
乃づゝ臨乳とのたまいぐさうくすおとらゝ門まぎに
ゝゝゝゝこれバこゝ為あるくハ法まぢゝこにさぐうくなも
ひぐもるくゝども知ぢ仁ハえるぬ乃やびをゝを
さしくゝバさやゝ乃事いとも為ゝゝ仁ハ為ゝ仁ハ
まゝくゝくハひと我ハわまとおぼして仁走ゝハむつよ
しをまゝをのおりひくハも勝ゝゝ仁くバとのづゝ
ゝぢづゝくゝりくハハいどくなゝるぢゝてぐ
りハまゝ徳義仁ハいとゝ我が仁ゝゝりハ一ハに
ムゝつゝをゝぐゝまを我ひゝし強ともを
しゝゝずゝを仁ゝゝゝまれ魔物ぐハるけ
おせられまで行未根のびして仁門ひゝさハうぐゝを

わぢゝハちんぢてずやハゝもわ仁ぞゝ人の代
のをもあゝ義代もゝなれ難れどく泥もくなゝ
事ゝゝくゝどゝを造なれを世のるゝねぬぬゝるぐゝ事
ゝくもハるバゝれゝれぢゝを仁ゝはおりひゝるゝ
為新山化野の野ゝゝりにハゝね彼ゝぐゝく山孫ハ乃
かをゝさむゝゝるバ月陰ゝゝまれ外新りどく光ゝゝる
仁人ゝ世代ゝゝゝゝ仁為ゝゝ仁ゝ為て又ゝ新ゝ
ゝ人ゝゝるくゝりれゝゝ仁ゝゝ為ゝゝゝゝ仁ゝれゝ
ゝゝほ世を親ゝ仁ゝれ海士の星楽ゝ仁ハゝゝゝ
ゝゝゝくゝゝぢゝれしゝあゝれ足髪ハ為山の
実驚ゝのゝゝあゝゝまぐゝたゝゝなゝぐゝゝハ仁ゝるハ
なゝ代ゝあゝずゝゝ求ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

色くれうまとりてこにもどせるハまさうそく
うんの法を建おりまさば行ハりさむしふべきはも
ども空すにあまりやもあれこのてぐみをうけるから
ひこづけさうぞくめくさぐひもうく唐文は
子七人あり母乃さ絵を安ぎる事はうばくれ
業平の百ゝせにてゝ絵うぬはくも髮く後し
たぐひ月んぐらしくハこずや朝夕かうとてぐさ
絵とつゝ書をうおるぐらすをおこさうだた
乃ませ絵くとはぐ仏ぐ文ハ月んてくどもゝ
をゝ色のまばゝて是ハまさうぬのにいぐ只世
絵に書しゝ仏父の女房ぐれ今ませにおはくさむ
らくハるしさやゝなるハぶしうぐさるのくいひ

りゝ日と記れ月をうさゝ枕の磨ハはらとても
くるでゝたりこうくんれ分まりうればゝて又笑
にたりあさめりくるまぐの情をわゝしハ笑とう
ひ絵れ池乳をばもゝで書ゝうるもゝ行ぐ
さるまはうぐや背つくふまうゝ侍児達さうて
あゝ四てこうの四あゝ絵や祇ハかう彼ハくゝそうんぐ
やさひゝ四ゝもゝ本ゝおしゝ四ゝもちぐうさぐまうるか
まばゝあばゝしうて書ぐうゝ我ハ笑てもうるし
かゝ面ゝきにめぐうゝ子ゝる事かゝまるんゝくさうう
あゝゝび仏らまゝうゝいまぐゝもゝ
さうゝゝゝ絵ゝうゝ嫁ゝうゝをゝびゝいなひゝうゝを
ゝくるゝれるいるゝ女子別ゝんゝゝくゝを

第十三圖

陳ぼ
世石
ふ井